様式１０
設計主旨説明書

整理番号	

六歳までは神の内

人は、魅力的な子ども時代を体験するために生まれてくる。

人は、両親か、親友か、パートナーか、誰かは分らないけれど、いつかどこかで誰かに出逢うために生まれてくる。大人たちは、そのために志と情熱、労働と技術とで、コミュニティの「務め」として、子どもたちのために素敵な「遊び」と「学び」の環境を調える。次の世代は、それを維持継続発展させるだけでなく、新奇さや流行も取り入れ、時代の叡智となし、祭礼にも影響を与えつつ、精度を深め、より愉快な環境とする。それは繰り返され、伝統と風習となって時間を超えコミュニティに定着していく。子どもを育てるには、村や町がまるごとひとついるのだ。

子どもたちは、魅力的だ。

世間体を気にしない、周囲の評価を当てにしない、そのものに、なりたいものに成り切る、遊びの中でも、状況に応じてルールを変更する、そして、なによりも大切なこと ―眼だけで、人や事象を見て判断しない。うつくしいものを見たいと思ったら、眼を閉じよ、ということを本能的に知っている。視覚的独裁から自由で、五感で、時には六感まで動員して世界を見ることができる。結論を保留する勇気すら持っている。さらに、世界と自分が闘ったら、世界をとるという謙虚ささえ持ち合わせている。

少年たちは理知的で初々しい。少女たちは聡明で蠱惑的だ。

そして、その上に瑞々しい感性と豊饒な才能と、未来への可能性と時間を持っている。だから私たち大人のように、つまり子ども時代の感性と才能を捨てることが、大人になることだと教えられてきた生き方ではなく、その豊かさを持ったまま大人になっていって欲しいと、心底から思う。大人になる通過儀礼のプロセスとルールの間にも、それを武器にして生きていって欲しい。子ども時代は、人生にとっての夏休み時間。子ども時代を十二分に生きた人は、大人になって人生の苦難に直面した時、子ども時代に戻って、懐かしんだり、癒されたりして、大人の中の子ども性を確認することで、新しい生き方の、リ・スタートが切れる。よい大人への準備期間として子ども時代を過ごした人は、そこに帰ることがなかなか難しい。

瑞々しい子ども特有の感覚を持った魅力的な大人になること。
う～んと子どもであり、う～んと大人。
それにユーモアが備わっていたりいうことはない。

旧ソビエトの芸術心理学者のヴィゴツキーの言う「子どもたちには、課題を自ら解決していく能力の領域と、周囲の助言や幇助によって解決できていく領域があり、さらにそのふたつの間に『発達の最近接領域』がある」と。私たち大人は、それぞれの子どもたちにある『発達の最近接領域』を見据え、できるかぎりの助言や支援をしつつも、その才能や能力を信じること、それが―所懸命に夏休みを生きる子どもたちに対する礼儀作法であり、子どもの教育に対する共有すべきルールだろう。そのためには、子どもたちが「ここは素敵な空間だ」、「ここには魅力的なプログラムがある」、「ここで働く人たちは、愉しそう、そして自分たちの味方だ」と思わせるような、地域社会の中に家庭でも学校でもない第三の子どもの居場所のような環境と空間とをつくって欲しいと心から願う。そんな居場所が、幼稚園と保育園と支援センターが―体化するものとして田川市にできれば、素晴らしい！子どもたちはとても歓ぶだろう。大人になっても思い出の宝物の場所となるだろう。

子どもたちは、エキセントリック・ブリヴィレッジ―風変わりな特権―を持っていないと生きていくことができない。

鳥になって空から見る視線。ガラクタで自分だけの宝箱を持つ技術。仲間とつくる木の上の秘密基地。彦山川に鯨を探そうとする気持ち。お化けの缶詰をスーパーで探すこと。ヒットを打って三塁ベースに駆け込む。出口から入って入り口から出る作法。そんな風変わりな特権があってこそ、魅力的な大人になるのではないだろうか。

そんな子どもたちが望む、幼保一体化空間とはどんなものか。

大人たちは、それにどのように関わるか。住民たちと行政、教育委員会、幼稚園、保育園関係者の情熱と感性と技術が試されている。そしてなによりも大事なことは、空間と運営と人材だ。

１８４０年、世界初の幼稚園はドイツでフリードリヒ・フレーベルによって設立され、そのときの名前は、キンダー・ガルテン＝子どもの庭と呼ばれた。１８７６年、日本がその影響を受け設立された幼稚園の「園」は、ドイツ語のガルテンの訳語の意味を継承している。ちなみに正式名称は、東京女子師範学校附属幼稚園で、今なお、東京のお茶の水女子大学附属幼稚園として存続している。１８９０年、保育園も、最初は『託児所』として設立され、１９００年代には、「公立の育所」として続々とつくられ、その後、保育園と名称を変え、幼稚園同様「園」と冠されたのも、ドイツ語の「ガルテン」故だろう。

だからまずは敷地の「園」の計画が大切だ。

魔法の庭、生命を育む農園、冒険遊び場、親水空間、園内遊具をどのようにデザインし配置していくのかは、幼稚園にとっても保育園にとっても、生命線であり、アイデンティティに関わることと認識していた方がいい。さらに、子どもたちの棲家である建築空間と、アイデンティティとしての庭園との「あわい」のデザインも肝要だ。こうした中間領域にこそ、日本の美しさや美意識が育まれてきたことをさりげなく子どもたちに知らせ、体感させたいと思う。

子ども施設は、ハードウェアだけでなく、ソフトウェア、ヒューマンウェアが並走してこそ、より魅力的になる。

さらにさらに、一番の問題は、この国には、制度や空間や幼児教育を考える人はたくさんいるが、幼保一体化とは、どんなプログラムで子どもたちを遊びと学びに誘うかを考えている人がまったく見えないことだ。幼保一体化のプログラムとはどのようなものか、幼保一体化による新しい「園」の運営理念とその方法とは何か。ぜひ、市民、現場の関係者、行政、高等教育機関とが、それこそ一体となってそこから協議して欲しいこと。そこから素晴らしい敷地計画、建築計画が生まれるのではないか。
幼稚園は幼稚園のまま、保育園は保育園のまま。それでは決していい結果は出ない。子ども施設は、ハードウェアだけでなく、ソフトウェア、ヒューマンウェアが並走してこそ、より魅力的になるのだと思う。

幼稚園も保育園もなかった頃、子どもたちは、地域社会の人々だけでなく、自然界の動植物と海山川・湖池に守られ、「六歳までは神の内」と大切にされていた。幼い子どもたちは、人間界と自然界と神の世界とを行き来する生き物だ。古典芸能の子どもたちの稽古始めが、六歳の六月六日とするのはその故だろう。そんな神の内の住まう幼い人々と付き合うのは存外難しいものだ。

慎重に大胆に。細心に愉快に。丁寧に時間をかけて、どうぞ。

子どもの居場所研究者からの提言

CONCEPT
ガルテン―子どもの庭

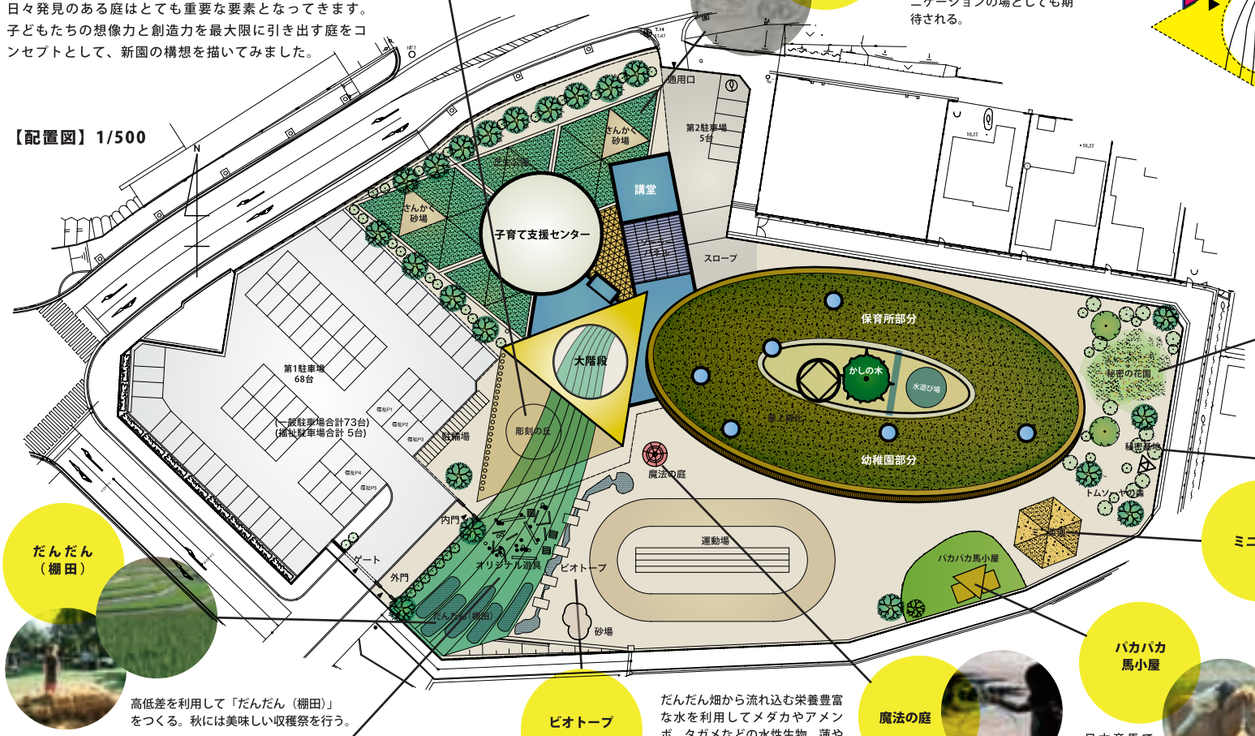
幼稚園も保育園も子どもたちは一日中園舎と園庭をたえず往還しています。ですからどちらも魅力的で愉しい空間である必要がありましょう。世界最初の幼稚園はドイツでつくられました。その幼稚園の名前はキンダー・ガルテン ― 子どもの庭でした。子ども時代の生活時間の多くを過ごす幼稚園・保育園の庭。

子ども時代の暮らしのなかで安心して、冒険できる庭、日々発見のある庭はとても重要な要素となってきます。子どもたちの想像力と創造力を最大限に引き出す庭をコンセプトとして、新園の構想を描いてみました。

内門を抜けるとそこには大階段と大型立体アート作品が印象的に広がる。

０・１・２歳児が砂場と芝生を行ったり来たり。指先や足先の感覚を刺激して豊かな発達を促す。

【配置図】1/500



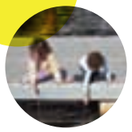
だんだん（棚田）

高低差を利用して「だんだん（棚田）」をつくる。秋には美味しい収穫祭を行う。

オリジナル遊具

遊具は植栽や高低差を利用したロープウェイなどオリジナルを制作。草スキーもできる。子どもたち、保育士たちと遊びを開発しながら、進化していく遊具をつくっていく。

ビオトープ



だんだん畑から流れ込む栄養豊富な水を利用してメダカやアメンボ、タガメなどの水性生物、蓮や葦などの水性植物を定着化させる。思い切り水遊びを楽しむ「ちゃぶちゃぶ池」とはひと味変わり、いきものの循環を子どもたちが遊びながら肌で感じられる水場をつくる。

魔法の庭

巨大なシャボン玉をつくるゾーンや、風力を利用した不思議な装置などを設置。魔法というファンタジーへの憧れと科学への探究心をくすぐる仕掛けを備える。

バカバカ馬小屋

日本産馬である対馬馬を園庭の一部を利用て飼育する。身体障害・発達障害の子どもたちに対してもホースセラピーとして、地域に開いた運営も期待される。

ディスカバリールーム

音楽活動・ダンス・身演劇等の体表現を主に行う空間。さらに科学技術を使った様々なしかけを備え、子どもの感性を刺激する。

絵本の森

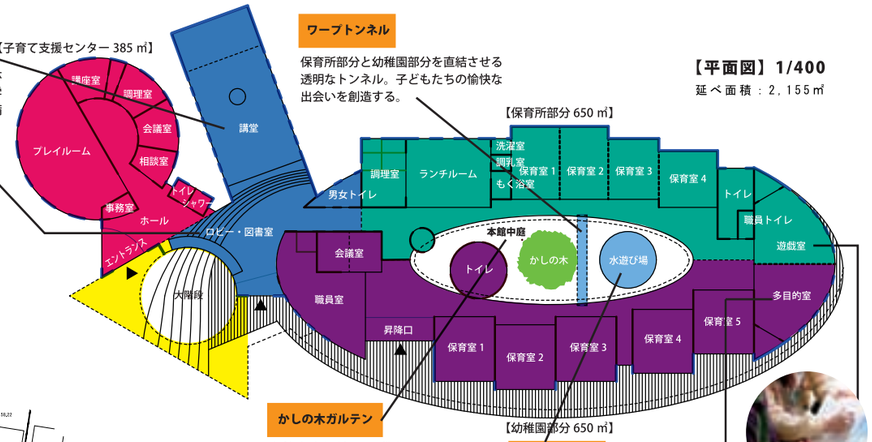
土地の高低差を利用して、エントランスにもひな壇上の絵本スペースを設置。お迎えの親同士や、保育園と親のコミュニケーションの場としても期待される。

ワープトンネル

保育所部分と幼稚園部分を直結させる透明なトンネル。子どもたちの愉快な出会いを創造する。

【平面図】1/400

延べ面積：2，155㎡



かしの木ガルテン

本館中庭にはシンボルツリーとしてかしの木を配置。大きな木に見守られながら、子どもたちは成長する。

ちゃぶちゃぶ池

水遊び場。真夏の強い紫外線から子どもを守るため、保育所部分から幼稚園部分にタープをかけることができる。

こうさくルーム

園行事などに必要な造作物を制作する空間。

アートルーム

アート活動の場。ペインティング・立体造形などを行う。

秘密の花園

季節によって様々な彩りを見せる草花・木の花を計画して配置。実がなり食べられる木も効果的に配置する。

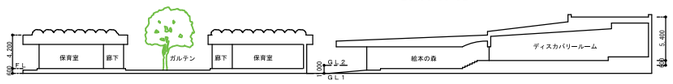
トムソーヤの森

トムとハックがつくりそうな、わくわくするツリーハウスの秘密基地。野鳥のサンクチュアリなど様々なしかけのある木々。屋外のアクティブな見立て遊びを喚起する森をつくる。

ミニ菜園

農園で食べられる作物を育てる。収穫した作物は、子どもたちのおやつとして提供する。

【断面図】1/400



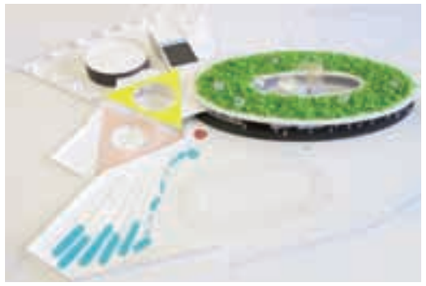
【設備設計】

●軒を深くした構造、換気タワー（自然通風）、屋上緑化に等により空調負荷の低減を図る
●床下空調換気システムにより居住域空間（床から 1.0M 程度）の温室度管理を行う

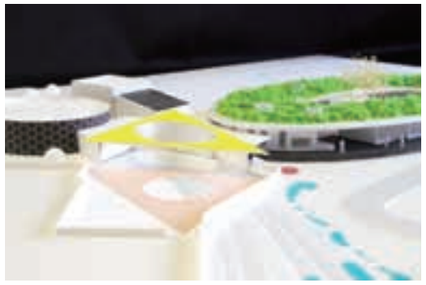
【構造計画】

●構造フレームをできるだけシンプルにし、複雑な間仕切り壁は乾式壁とする
●各室の間仕切り壁を将来容易に変更できるよう、できる限り無柱空間とする

DESIGN POINT

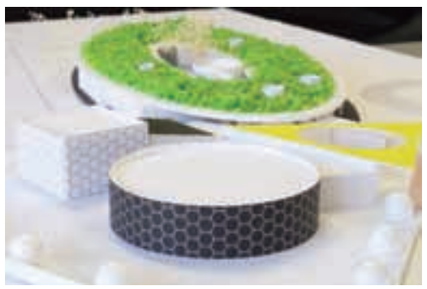


① 子どもの感性は●▲■だ！



② 敷地中央を横切る大階段

現況敷地にある高低差を利用し、南北に（建物内にも）貫く大階段を設置し、たまりをつくる。棚田、遊具、アートの庭、絵本の森などの空間を創る



③ 田川のシンボル、黒ダイヤと白ダイヤ

田川の産物、石炭と石灰を炭素の結晶である六方晶系をモチーフにしデザインした